本書は、「報道班員」の中でも、大本営・海軍報道部によって組織された
文学者・作家を中心とした「文学」部隊からの資料より編集・構成。
未解明の「大本営報道部」メディア体制の意図・背景について資料的糸口を
提供し、戦争と報道・戦争とメディア、さらに広く戦争と文化・教育を考察。

『海軍報道』

全五巻
＋
別冊
［復刻版］

―大本営・報道班員・徴用作家

解　　題―須山 智裕（慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程）
　　大津 昭浩

資料提供―靖国神社靖国偕行文庫／石川巧ほか
造　　本―並製／ A5 判／総 1,704 頁
揃　　価―89,000 円

【第一回配本】2022 年 1 月　ISBN978-4-910363-51-6　■揃価 17,000 円

・一巻　360 頁
『海軍報道』1 巻 1 号～ 1 巻 4 号（1944 年 5 月～ 1944 年 8 月）
・別冊　38 頁（別冊のみ分売可 ISBN978-4-910363-54-7　1,000 円）
＊解題（須山 智裕・大津 昭浩）、総目次

【第二回配本】2022 年 8 月　ISBN978-4-910363-52-3　■揃価 36,000 円

・二巻　348 頁
『海軍報道』1 巻 5 号～ 1 巻 8 号（1944 年 9 月～ 1944 年 11 月）
・三巻　268 頁
『海軍報道』1 巻 9 号～ 2 巻 3 号（1944 年 12 月～ 1945 年 3 月）〔2 巻 2 号欠〕

【第三回配本】2023 年 2 月　ISBN978-4-910363-53-0　■揃価 36,000 円

・四巻　390 頁
『現代日本の戦争文学』（板垣直子、六興商会出版部、1943 年）
著者はくろがね会会員。軍報道部および報道班員の性質や活動について、体系的に論じる。野戦病院及び陸軍病院もの／戦傷文學／従軍看護婦の報告類 / 靖國英靈の妻の生活記録／大東亞戦爭下の戦爭文學／作家報道班員の仕事／統制された新聞記事としての現地報道 ／軍部の採用した新らしい報道方法について他。

・五巻　300 頁
『赤道を越えて』（井上康文、若櫻書房、1943 年）
著者はくろがね会会員。
ラバウルにおける海軍報道班員たちの交流の様子を詳細に描く。

関連図書のご案内

海軍外郭団体雑誌『くろがね』

編・解題―石川 巧（立教大学文学部教授）
造　　本―全三巻＋別冊　A5 判　総 860 頁
揃　　価―揃価 63,000 円

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣
〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30
Tel 076-261-8884　Fax 233-3111
□書店様へ…ありがとうございます
直接小閣までお申し込みください

図版はすべて本書より
価格は税別　053／02／4000

書誌・出版史・書物メディア史のシリーズ　＊文圃文献類従83＊

アジア・太平洋戦争末期発行部数 20 万部を超える
国民的大衆ビジュアル写真入雑誌

『海軍報道』

―大本営・報道班員・徴用作家

雑誌『海軍報道』は、海軍省外郭団体「くろがね会」が、
海軍報道部の後援によって創刊（昭和十九年五月）した月刊誌。
海軍募兵を主とし、海軍関係の読物・小説など、
「くろがね会」会員の報道班員に作品発表の場を提供。

推薦文

「『報道班員』—従軍報道とは異なる新たなプロパガンダ機能の創出」

大津 昭浩（おおつ あきひろ／日本大学大学院新聞学研究科博士課程満期取得、現専門紙記者、ジャーナリスト）

「報道班員」の定義はジャーナリズム史の中で、正確な位置付けが定まっていない。その背景はやや、複雑である。明治期以降、日本の近代化に伴って行われた戦役・戦争において、軍隊に追従、従軍して取材・送稿を行う新聞記者が誕生した。こうした従軍取材は、新聞・通信社ないし、出版社が取材記者を特派して行われるもので、この取材に当たる記者はウォー・コレスポンデントと呼ばれる従軍記者を指す。満州事変以降、いわゆるアジア・太平洋戦争期においては、これらの取材記者には、ペン記者およびカメラ記者（スチールおよびムービー）が該当している。記事・写真の送稿に際しては、軍からの便宜を受けられる場合もあるが、無電電信装置や写真電送装置を取り扱うオペレーターの存在が不可欠である。特殊なケースとしては、支那事変時に日本放送協会による現地録音や、実況中継といったことが行われた例もある。

これらの記者が従軍報道を行う許可は、現地部隊の裁量（取材記者の安全を確保する責任も含まれよう）の幅が大きい。出入国の許可、旅券の取得などの手続きを経て戦闘地域に赴くが、同地域内での従軍取材に関しては現地軍が許可証発行や、取材腕章の貸与などを行うのが通常である。特に、日中戦争以降の形態としては政府派遣の“文学者部隊”が南京攻略戦に際して、陸軍班、海軍班に分かれて派遣された。いわゆる「ペン部隊」で、後の「大本営報道班員」の編成構想は、このペン部隊による国内向けプロパガンダが一定の成功を収めたケースを参考にしたと考えるのが適当であろう。これらを踏まえた上で上記、戦時期の帝国日本において存在した「報道班員」をその組織体制側からみると、以下のような3類型に分けることができる。

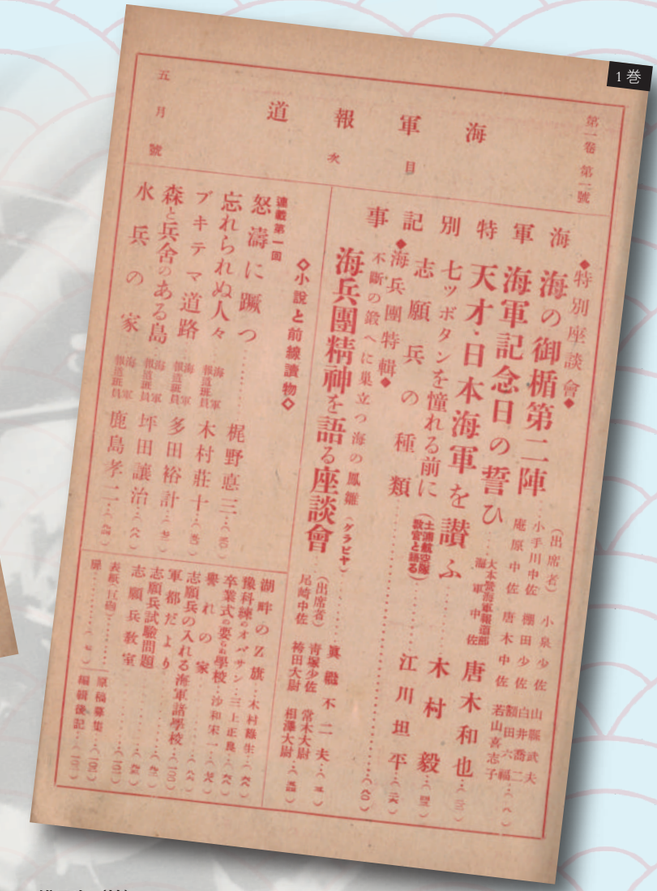
1：帝国陸軍・支那派遣軍（1939～1945）が“編成”した「報道班員」
2：新聞・通信社が戦時期（～1945）に派遣した“取材班”としての「報道班員」
3：大本営・陸軍報道部および海軍報道部（1941～1945）が“徴用”した「報道班員」

本誌に収録された資料は、「報道班員」の中でも、文学者・作家を中心とした“文学”部隊からの目線である。戦時期の国策通信社設立や、主要新聞社の統廃合が進められている中で、大本営報道部が国策遂行にとって有効なプロパガンダを自ら編み出そうとした意図・背景については未解明な部分が多く、幅広い領域からの研究が求められている。その意味でこの復刻は有力な資料の一部となろう。

平出 英夫（ひらいで ひでお、1896年-1948年）
1924年海軍大学校選科、東京外国語大学、36年駐伊武官、
40年大本営海軍部報道課長として大本営発表に携わる、43年軍令部課長。

1940年以降、戦時期帝国化する日本において、
国策通信社設立や主要新聞社の統廃合などが進行した。
報道メディアの在り方が急速に変化を迫られる総力戦のなか、
「大本営報道部」が国策遂行にとって有効なプロパガンダを自ら編み出そうとした。

「大本営報道部」は、何を報道し、宣伝し、どう発表したのか？



総目次（抄）

「海の御楯」第二陣—愛する子弟を海軍に捧げた父兄と海軍当局との座談会
〈誉れの家〉7人の子息が全部海軍—福岡市・池田信太郎さん一家
海軍はかく育てる（学生隊座談会）
特集〈誉の家〉「海軍の街」の建設者—宮城県訓導・高橋小一氏　北島 邦雄
決戦の覚悟を語る—サイパン以後（対談）
　唐木中佐（大本営海軍報道部）／山岡 荘八（報道班員）
『徴募第一線』海軍募兵の現状を語る（座談会）
〈鍛へる海兵—武山海兵団見学記〉少国民諸君、かうすれば機関兵になれます
　文・海野 十三（報道班員）／絵・林 唯一
帝国海軍巌の如し（報道班員座談会）
　浜本 浩（海軍報道班作家挺身隊）／井上 康文（海軍報道班作家挺身隊）／
　木村 荘十（海軍報道班作家挺身隊）／新田 潤（海軍報道班作家挺身隊）
入団用意について　大下 宇陀児
甲種予科練への道（応募優秀校座談会）
補給戦に必要な海軍志願兵（折込解説・絵とき）　片柳 忠男（横鎮嘱託）
戦ふ聴音器—海軍対潜学校・座談会
米と弾丸と（海軍小説）　角田 喜久雄（海軍報道班文学挺身隊）／挿絵・柿原 輝行
浅春壮行歌（詩）　江口 榛一
〈戦ふ水兵〉水雷艇記　浅見 淵（海軍報道班文学挺身隊）
……